

カナダ

福川 須美

一、「子育ては楽しい」カナダ

カナダは日本の二十七倍の国土に人口は三〇〇〇万人
余りと四分の一、人々はアメリカ国境に接する南部に集
中して暮らしています。国民のルーツは、ネイティブ

系、イギリス系、フランス系、その他のヨーロッパ系、
東洋系等七十を超すといわれ、多種多様な文化を認め合
いながら、カナダという「サラダボウルの国」あるいは
「モザイクの国」を形成しています。文化も価値観も異
なる人々が対等かつ平和に暮らすには、お互いの違いを

尊重し、人権を侵さない努力が必要になります。また、開拓時代からの助け合いと連帯は今も人々の生活の隅々に生きています。

ところでカナダの子育て事情や子育て家庭支援を日本に紹介したのは、故小出まみ氏ですが、その頃、日本では母親たちの育児不安や子育ての辛さが問題になっていました。彼女は出会ったカナダの母親たちが異口同音に「子育ては楽しい」と答えることに関心を持ち、なぜだろうとその理由を探究しました。その結果「地域から生まれる支え合い」があるからだということに気づいたのです。

その後、カナダの子育て支援についての関心は急速に高まり、わが国の子育て支援施策にも影響を及ぼすほどになりました。例えばカナダに普及しているドロップインという親子の居場所・親子ひろばは、「つどいの広場事業」として国の補助事業になり、中・高校生が赤ちゃんとに触れ合う事業の背景にはカナダの「共感の根」教育の存在を無視できないでしょう。

二・子育ての基本理念——「誰も完璧ではない」

カナダの連邦政府が助成するノーバディズ・パーフェクト・シリーズという子育てガイドブックがあります。冒頭には「親になるために生まれてきた人はいません。親であるには誰もが助けを必要とします。完璧な親も完璧な子どももいません。最善を尽くすしかありません。親には親の人生があります。自分の時間を持つことは身勝手な後ろめたいことはありません。親自身自分が大切にしてこそ子どもにとってよい親でいられるでしょう」という子育ての基本理念と励ましのメッセージが掲げられています。

同シリーズは「こころ」「からだ」「行動」「安全」そして「親」の五巻からなり、子育ての基本を分かりやすい絵と文章で伝え、なによりも親が自分で問題をどのような道筋で解決すればよいかを理解できるように編集されています。後述するファミリー・リソース・センター等で開催されるグループ学習で、ファシリテーター（助

言者兼促進者」とともに相互学習しながら、参加者に無料で配付されるこのシリーズを役立てるのです。日本の親にとっても、これまでにない新鮮な視点で子育てを見直すことができるシリーズです。日本語訳も出版され、活用の手引きもありますので、ぜひ繙いてみて下さるようお願いいたします。日本でもファミリー・リソース・センター養成が始まるうとしていきます。

ただし、このシリーズはカナダで子育てする親たちのものですから、そっくりまねをするのではなく、親を尊重することや支援の姿勢、考え方、方法を学びたいと思います。

子どもの親になることは、家族のライフステージとしては大変おめでたいこととされ、一般に祝福されますが、親夫婦にとって幸せな面ばかりでなく、ときには危機につながる場合があります。近年、北米では「親への移行期」の危機的な側面に注目する研究が盛んに行われています。さまざまな面で、現代では、親になるのはそう簡単なことではないようです。わが国でも親になるた

めの学習やサポートが必要な時代を迎えているのではないのでしょうか。

三、子育て家庭を支援する

ファミリー・リソース・センター

カナダは子育て支援先進国のひとつですが、実際の子育て家庭は、なお多くの支援を必要としています。たとえば、移民してくる人々は親族の手助けもなく、知り合いもない、言語もわからないというように社会的に孤立することが少なくありません。離婚後の母子家庭の貧困等も問題で、トロントの子どもの三分の一は貧困家庭、四分の一は単親家庭で育つといわれます。十代の妊娠出産もわが国よりはるかに多いという実情です。

むしろ助けを必要としているからこそ、心ある人々の手で様々な支援活動が紡ぎだされ、財政も厳しいなかで奮闘努力が重ねられているといえるでしょう。その支援活動の中心的な担い手が全国各地に一九七〇年代頃から誕生するファミリー・リソース・センターです。地域の

ニーズに合わせた、地域の人々による支援が、草の根のように各地に拡がっていきました。今では全国組織があり、各地の活動交流や政策への提言など活発に展開しています。

ファミリー・リソース・センターの取り組む活動は多種多様です。日本がモデルとするドロップインは多くのセンターにあります。○歳時の親たちでも気軽に訪れることのできる親子のひろばで、予約なしで、子連れで楽しめ、親子ともども友達づくりができます。もちろんスタッフに子育てに関するさまざまな相談をすることもできます。なかには朝食つき、昼食つきのプログラムもあり、また、母親ばかりではなく、父親向けのプログラムも用意されます。

わが国の子育て支援の内容は子どもの保育や一時預かり、育児相談、親子ひろば等、どちらかというときまだ母親の子育てを支援するにとどまっています。カナダでは子育て家庭のあらゆるニーズに対応した支援を意味します。「福祉」も「保健」も「保育」も「住宅問題」

や「職業訓練」までも、あらゆる局面に及ぶ包括的な支援を実施しています。個々のニーズを支援条件や規定に合わないからと切り捨てず、あらゆる社会資源や地域ネットワークを駆使して、その家族のウェルビーイングを達成することを理想としています。難民家族への支援事例など日本では考えられないほど柔軟で、包括的な連携プレイであり、しかも家族の自立を支援するみごとにソーシャルワークです。問題を抱えた家族というレッテルを貼るのではなく、ニーズを持つ市民として処遇し「必要な支援は支援される人が決める」という徹底した「当事者主権」の姿勢でことに当たるやり方は、福祉対策の革命的な方法を提起しているのです。

その運営に当たるのはNPO、学校法人、教会など多様な団体ですが、基本的には各自自治体や慈善団体・財団の助成を得て、利用者にはほとんど無料で提供されます。しかし助成金は運営費のすべてを賄うには不足がちで、次々に生まれる地域の新しいニーズに対応するため、常にスタッフは資金確保のためのバザーや有料プロ

グラムなどの活動に奔走しているのが実情です。助成金が切れてもニーズがあれば、ボランティアでも継続していくという熱意ある女性たちに支えられている事例にも出会いました。

四・保育ニーズへの対応

カナダでは、六歳未満の子どもを持つ母親のほぼ七割が働いています。失業率が高いことや離婚率の上昇による母子家庭の増加などで、女性の就業率は全体平均でも七十パーセントに達します。カナダでは日本のような全国同一の最低基準に基づく認可保育所が全国に展開しているわけではありません。各州によって保育政策にはバラツキがあります。

ファミリー・リソース・プログラムのなかにも保育ニーズに応じる事業があります。ファミリー・リソース・プログラム全国協会では、保育ニーズについて、家族はいろいろな保育ニーズを持っており、それらに対応するには、単一の保育形態だけではむずかしく、いろいろ

るなタイプを組み合わせて、その家族が必要とする保育を提供することが重要であるという立場をとっています。ここでも徹底して個々のニーズを尊重する姿勢です。

もちろんカナダにも働く親のために国による統一した保育政策を要求する運動があります。しかし、同全国協会は、フルタイムの共働き家族のための保育所だけではなく、もつと広く保育ニーズを捉え、フォーマル、インフォーマルを問わず、多様な保育ニーズにシームレスに対応することのできる地域づくりを指すべきだと考えているようです。

例えば、ファミリー・リソース・プログラムが提供する保育サービスには、ナーサリースクール、ヘッドスタートや幼稚園就園準備等半日制の発達支援プログラム、乳児から学童期までをカバーする文字通りの保育、十代の親向けの特別な学習プログラム、認可の家庭型保育、保育センターが複数の保育所や家庭型保育を管理し、スタッフを支援し、資源を共有する形態、アウト

リーチや訪問型の保育サービス、一時的や短期間の保育、学校の休暇等の保育、夏のキャンプ、様々な親のためのレリーフ（手がわり）やレスパイトサービス、緊急一時保育、障害児の統合保育（専門家によるサポートつき）等々、実にバラエティに富んでいます。単に預かるサービスが沢山あるというより、子どもは親だけでなく地域ぐるみで育てるのだという姿勢が感じとれます。

表1のように、サンプル数は少ないのですが、日本人に比べて、カナダ人は他人の子どもを育てることに心理的な抵抗が低いようです。親戚となれば七十パーセントが「引き受ける」と回答しています。人種や民族が違ってもよいという回答も日本人の二倍はあります。実際、トロントの街では、肌の色の異なる親子連れの姿をちょくちょく見かけました。

ところで、日本では主として共働き家族のための「保育に欠ける」乳幼児のための保育所が全国各地に整備されています。その発展はカナダとは比較にならないほどの質量です。カナダの働く母親達は日本の保育所を羨ま

▼表1 他人の子どもを養育してみたいか（註）

		カナダ人	日本人
1 自分の子どもがいなかったら 引き受けますか (P<.05)	①はい	17 (29.8)	44 (18.8)
	②いいえ	15 (26.3)	73 (31.2)
	③わからない	20 (35.1)	110 (47.0)
	N.A.	5 (8.8)	7 (3.0)
2 親類の子どもなら 引き受けますか (P<.0002)	①はい	40 (70.2)	78 (33.3)
	②いいえ	2 (3.5)	47 (20.1)
	③わからない	13 (22.8)	102 (43.6)
	N.A.	2 (3.5)	7 (3.0)
3 人種・民族の違う子どもを 引き受けますか (P<.005)	①はい	27 (47.4)	48 (20.5)
	②いいえ	7 (12.3)	56 (23.9)
	③わからない	20 (35.1)	124 (53.0)
	N.A.	3 (5.3)	6 (2.6)
合計		57 (100.0)	234 (100.0)

しいといえます。しかし、児童福祉施設として「保育に欠ける」場合のみ入所できるといいうように利用者を絞りこんできました。したがってフルタイム以外の保育ニーズや家庭の子育てを支援するという発想は、エンゼルプラン登場までほとんどありませんでした。

カナダでは、連邦政府や州政府の保育政策、資金援助の程度などの差異を反映して、ファミリー・リソース・プログラムが提供する保育サービスの内容も違っていきます。オンタリオ州では一九八一年に「保育サポートセンター」というパイロットプロジェクトに資金援助が行われ、ブリティッシュ・コロンビア州では、連邦政府の戦略に基づいて、保育サービスとファミリー・リソース・プログラムとが様々な方法で、もっと接近し、統合されるに至りました。しかし両者が互いに分離独立したままの州も多く、働く親支援のための保育と家庭にいる親の子育て支援に分かれているため、競合してしまい、実際、ケベック州では一九九七年、就労支援の保育は予算増されたが、子育て支援には乏しい予算しかないという



▲0～1歳児のために区切られたスペースでゆったり過ごす常連の親子（トロントのファミリー・リソース・センターのひとつ、チルドレン・プレイスで）

事態が生じたといえます。

五 おわりに

わが国では次世代育成支援対策推進法が制定され、一応、両方の施策が推進されることになっていきます。しかし、保育施策は雇用優先の預かり場所づくりに偏り、子どもの権利や発達保障の観点から重視すべき保育の質は骨抜きにされつつあります。親にも子どもにもやさしい地域づくりはこれからでしょう。必要な人に必要な支援が確実に届く地域社会にするために、ひとりひとりが声を挙げて、同法の下、すすめられる予定の地域計画に反映していきましょう。カナダと日本は、子育て支援が必要になった背景や実情が異なりますが、カナダの地域に根ざした柔軟な子育て家庭支援には、多くを学ぶことができるでしょう。

(駒沢女子短期大学)

註 「カナダと日本の子育て家庭調査(一九九八～一九九九)」

の結果から作成。子育て家庭リソースセンター発行『人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て家庭システムの研究』資料P9より

参考文献

小出まみ著『地域から生まれる支え合いの子育て』ひとなる書

房 一九九九

向田久美子訳・子ども家庭支援センター監修『ノーバデイス・パーフェクト・シリーズ』ドメス出版 二〇〇二(なお別刊に「父親」および「活用の手引き」がある)